

切り絵『親子猿』 比企善彦作



うぶすな

茨木神社社報
発行所
茨木神社社務所
茨木市元町4-3
072(622)2346
http://www.
ibarakijinja.or.jp/

干支について

「えと」と言うと、普通は十二支をさしますが、干支と書くように「十干」(甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸の十種)と「十二支」(子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥の十二種)の組み合わせたもの六十種をいいます。甲子から始まり、乙丑、丙寅と順に進みます。

たとえば、甲子園球場は、大正十三年甲子の年につくられ、戊辰戦争は、一八六八年の戊辰の年、壬申の乱は、六七二年の壬申の年の出来ごとです。数え年の六十一歳は、生まれた年の干支に戻るので、「暦が還った」という意味で「還暦」いわれます。

十二支は、年以外にも月・日・時間・方位などを示すためにも使われます。

二月最初の午の日は初午といわれ、全国の稲荷神社や会社のお稲荷様では初午の祭典が行われます。土用の丑の日や安産祈願に戌の日を選ぶ風習などは現在でもみられます。

方位は北から時計回りに子、丑、寅…と十二等分します。すると、北東、東南、南西、西北が表現できないため、北東は十二方位の丑と寅の間なので丑寅、同じように、東南は辰巳、南西は未申、西北は戌亥とも呼んでいました。余談ですが、鬼が牛のような角をはやし、虎のパンツをはいた姿がよく描かれるのは、鬼が鬼門(北東・丑寅)の方角からやってくると言われていたからという説があります。

平成二十八年は丙申の年にあたります。『丙』には「陽気が盛んになる一方、既に陰気が生じ始める」、「申」には伸と同じで「のびる」という意味があります。したがって、『丙申』の年は、基本的には陽気が伸びて、希望が持てるといえますが、油断をするといけない年といえそうです。六十年前の昭和三十一年の丙申の年には、神武景気と呼ばれる空前の好景気があった反面、三陸沖に大津波が発生しています。

茨木神社変遷

当神社の創始は、由緒書きによると「大同二年(八〇七)坂上田村麻呂が茨木の里をつくりしとき、天石門別神社が鎮座された」と伝えられています。平安時代の延長五年(九二七)に編集された「延喜式」巻第九にも摂津国島下郡十七座の一つとして「天石門別神社」の名が記されています。

時代が下って戦国時代末期頃に城下町が形成される中において、農村集落であった「茨木村」城下町内に組み込まれていきます。

この時、「天石門別神社」も現在地へ奉遷されたのです。

その一方で、社伝及び「摂津名所図会」(一七九八年刊)による

と高槻城主高山右近が織田信長に倣い神社仏閣を破却するに際し、信長が天照大御神、春日大神、八幡大神及び牛頭天王(素盞鳴大神)の諸社は焼くべからずとしたので

「天石門別神社」を「牛頭天王社」と詐称して破却を免れたと伝えら

れています。そして江戸時代の元和八年(一六二二)に新たに社殿を築いて「牛頭天王、春日大神、八幡大神」新たに祀り、「天石門

別神社」を奥宮としたと伝えられています。当神社に残された数多くの「棟札」や近年の調査・研究によって真相が少しずつ明らか

になってきました。

近年、茨木城の研究が進み、研究者が一樣に推論されるのが旧小

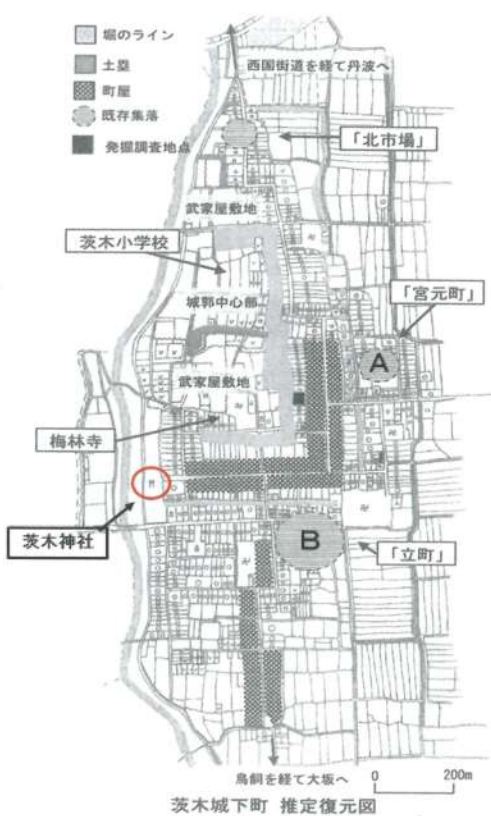


図 1

宇鳥屋垣内付近にも農村集落(図 1 B)があった可能性が高いとの指摘です。

この農村集落がいつ頃からできたのかは不明ですが、西暦千二百年代に現茨木高校付近の土地の売買に関する文書が伝わっている

ことから平安時代後期には、この付近は有力権門家や有力社寺による開発、そして荘園化がすすんで

いたものと思われれます。従ってその過程で農村集落(図 1 A)の分村として、成立したと考えられます。

そして今日のご本殿の三神、即ち、平安時代末頃からの病氣に対する

「牛頭信仰」の広がりによる「牛頭天王」、春日領又は興福寺領の荘園化での「春日大神」、荘園での収穫物の管理・運搬・護衛から

生まれた地侍による「八幡大神」、それぞれの信仰からこの村(図 1 B)でお祀りされていたのではな

いかと考えております。

そして、文禄二年(一五九三)の棟札(写真 1)にあります。この棟札には三社相殿と記しながら

も春日大神と牛頭天王の二社しか記されていません。この棟札は農村集落(A)から現在地に遷された「天石門別神社」の社殿に農村



牛頭天王宮

写真 1

集落(B)の二神を合せ祀ったことを示していると思われれます。

また、当社に天正十年九月(一五八二)「中川清秀」による「天石門別神社」への禁制札が残されています。この年の六月に本能寺の変が起きており、仮に詐称し、三ヶ月後に早くも元の名称

「天石門別神社」名に戻し使用したとしても文禄二年の棟札(写真 1)との説明がつきません。また、

「天石門別神社」の鎮座地は、領主中川清秀のまさに城下にあるのです。

ではなぜ、「摂津名所図会」にいう「高山右近」による破却を免れるために詐称したというこのようなストーリーが創作されたのか。

江戸初期以降、国学の高まりとともに神仏習合批判は激しくなっています。それは「仏語」のご祭神名を「和名」に正せということでもあります。国学者及び神道家の批判に対して「牛頭天王」を祀

る理由を織田信長におおいかぶせたのであって、この理由でもって初めて「牛頭天王」を祀ったのではなく、それ以前から祀っていたのではないか。

そして農村集落(A)及び農村集落(B)に祀られていた神社は天正の頃からの茨木城総構え形成の過程で、まず(A)から、その後(B)そして現在の場所へ移されたと考えられます。

明治元年の「神仏分離令」によってそれまでの各地の「牛頭天王社」は見事にすべて「素盞鳴命神社」又は「八坂神社」と神社名が変えられ、祭神名も「素盞鳴命」となりました。

その後、元和八年(一六二二)に「天石門別神社」を奥宮とし、新たに社殿を建造して「牛頭天王」「春日大神」そしてそれまで別殿でお祀りしていた「八幡大神」を合わせ三神をお祀りし本殿とし今日に至っています。(写真2)



牛頭天王宮

写真2

奉賛会だより 神社参拝バスツアー

恒例となつてまいりました、奉賛会の第三回神社参拝バスツアーが、十一月二十四日実施されました。昨年より多い八十五名のご参加のもとバス三台に分乗し奈良の春日大社に参拝しました。

春日大社は奈良に都が遷された、約一千三百年前平城京鎮護のために、武神である武甕槌命様をお祀りし後に、経津主命様と茨木神社本殿でもお祀りしている天児屋根命様と比売神様を御本殿にあわせてお祀りし創建されました。現在三十年ごとに行われる第六

十回式年造替の最中で、御本殿の修復にあたり、神様は仮殿にお遷しされています。

当日は、春日大社のバスの駐車場から神職の皆様のお出迎えを受け各バスごとに付いて各所を案内いただきました。正式参拝の後、武甕槌命様が天降られた御蓋山の頂上浮雲の峰の猿拝所を参拝し、参集殿で宮司花山院弘匡様より御講話いただきました。次いで、春日若宮御祭で知られる御旅所へ場所を移し、芝居の語源となつたと



言われる御旅所前の「芝舞台」や能舞台に必ず描かれている松の由縁になつた一の鳥居入つてすぐにある「影向の松」等々の説明に参加した皆様も興味深げに聞かれました。昼食は、一の鳥居すぐの老舗「菊水楼」で昼食をとり、親睦を深めました。

昼食後、茨木にも縁のある大和郡山市小泉にある慈光院を訪れました。

慈光院は、一六六三年大和小泉藩主片桐貞昌(石州・茨木城にて誕生)が、父貞隆の菩提寺として建立した臨済宗大徳寺派の寺院。片桐貞隆は茨木城主であった片桐且元の弟であり且元の位牌も祀ら

れています。また、慈光院の入り口に立つ山門は、茨木城廢城の折、茨木城の樓門を移築されたものです。

片桐石州は、茶人でもあり徳川四代將軍家綱をはじめ各地の大名が、石州の茶の教えを学びました。慈光院境内全体が、一つの茶席の風情になっており石州の演出そのままが残されています。その整備された庭の見える書院で、住職様のお話を聞きながら菓子と抹茶をいただきました楽しい一時を過ごしました。



「黒井の清水大茶会」

去る十月十七日(土)、十八日(日)、黒井の清水大茶会が行われました。「黒井の清水」から湧き出た清水は豊臣秀吉公がご愛用され、茶席用にわざわざ大阪城まで運ばせたという「名水」として古くより親しまれていました。それにちなんで茨木市観光協会では「大茶会」を秋の恒例行事として開催し、今年で十六回目を迎えました。十七日に神前に茶を奉る奉茶式が斎行され、その後境内に赤い毛氈を敷いた床几に腰かけ、一般の参加者やお参りのたくさんの方々が野点を楽しみました。また、境内



各所では茨木物産振興協会が手作りの木工製品やご当地の地酒・和菓子等を展示販売。また恒例のガラガラ抽選や茨木市内の様々な景観や昭和時代の懐かしい風景を写真で紹介するコーナーが設けられ皆さん懐かしそうに見学されていました。一方、普段は参拝者の憩いの場として利用されている待合所をステージとして茨木神社雅楽会による雅楽演奏や横山佳世子さんのお琴の演奏が行われ大勢の方々がご観賞されました。両日とも好天にめぐまれ二日間で約三千人が訪れ、境内は終日参加者の笑顔があふれる和やかな時間が流れていました。

抜穂祭齋行

去る十月二十六日、爽やかな秋晴れの下、秋季恒例の抜穂祭を齋行しました。今年は天候不順のせいか、秋口に稲穂に虫がつき、例年に比べると収穫できた稲穂は少なくなりました。当社での栽培は一般の農家の方々が営まれている水田とは比べるべくもなく小規模ですが、大きな水田でこのような虫が発生したり、台風が吹き荒れると、その被害は大変なものとなり、収穫の多少に直結する事態になりかねません。よく米の栽培にはその「米」と云う字から八十八の手間が掛かると言われますが、春の田植えから始まり、収穫を迎



える秋に至るまで、水田の水の管理や防虫対策などの作業を行い、農家の方々が、手塩にかけて育てて下さったお米を戴けるといふことが、どれだけ有難いことなのかと、あらためて思い至りました。本年も些少ではありますが新嘗祭で神様にお供えした、そのおさがりを奉賛会の皆様にお頒かちしています。どうぞ神さまの「おかげ様」に感謝頂きましてお召しあがりください。

これからの主な行事

- 十二月卅一日 越年祭
- 一月一日 歳旦祭
- 一月九日〜十一日 十日戎祭
- 一月十五日 御火焚(とんど)
- 新禱木奉焼祭
- 二月三日 節分祭・鎮魂星祭
- 二月六日 初午祭
- 二月十一日 紀元祭
- 四月八日 人形奉焼祭
- 四月十八日 春祭(新年祭)
- 奉賛会厄除安全祈願祭
- 六月三十日 大祓
- 茅の輪くぐり神事